

ひとひと
ともに担い、ともに築く女と男の情報誌



ねっとわあく

No.43

あざれあ10周年特集

わたし栽培図鑑

あざれあで出あつて



- P2~3 きゃべつ・くらぶ 増田 喜代子さん
- P4~5 NPO法人 たすけあい連州 稲葉ゆり子さん
- P6~7 DVサポートネット静岡 代表 横井美由紀さん
- P8 佐野修さん
- P9 沼津市議会議員 湯浅優子さん
- P10 斉藤典子さん

- P11 あざれあ講座・開催事業の変遷
- P12~13 杉山恵子さん
- P14 青木直子さん、青木秀夫さん
- P15 静岡県立大学助教授 犬塚協太さん
- P16~17 あざれあ探館MAP
- P18~19 県からのお知らせ

あざれあ10周年特集

「わたし栽培図鑑」

あざれあで出あって

開館して10年。
あざれあが蒔いた種は
地域に広がって芽吹き、
青々と葉を広げ、
たくさんの花を咲かせています。
何かやりたいけれど
どうしたらいいかわからないとき、
私ってこのままでいいんだろうかと
思ったとき、『わたし栽培図鑑』を
開いてみてください。
自分の持っている力に気づき
新しい力を発揮できる、
そんな未来の扉を開くきっかけが
ここにあるかも知れません。
さあ、あなたもあざれあで、
Let's start !

「きゃべつ・くらぶ」

増田 喜代子さん (裾野市)

人と人がかわって暮らすことが少なくなっているという現代社会。そこであざれあで学んだ知識を地域で生かし、「きゃべつ・くらぶ」を結成した増田さん。どういう経緯で、あざれあで学ぶことになったのか？「さらじ」きゃべつ・くらぶの誕生と活動について聞きました。

夫が変わった、私も

裾野市で生まれ、育ち、結婚した増田さんには、「この町に住みややすく元気な町になればいいな」という思いが心のすみずみにずっとありました。

一九八五年、夫賢治さんがオーソストラリアへ単身赴任しました。帰国後、「あっちの人は、生きるために働くんじゃない、人生を楽しむために働いていたぞ」と力説する賢治さん。さらに増田さんをびっくりさせたことは、夫婦がお互いに大事にしあう生き方を見て、「お前も何かしたいことがあれば、やっていいぞ」と賢治さんが言ってくれたことでした。

夫の意識が変わった。私もこのままでもいいかしら。増田さんはそれまでの生き方を自問するようになりま

「月の夜のいざないコンサート」の様子



あざれあで学んだことを
地域に還元。
いま音楽がいっぱい



「きゃべつ・くらぶ」のみなさん

ケーナを吹く夫の賢治さん



す。三人の母であった増田さんは、PTAの活動などをしながら考えました。十年近くかかって出た答えは「勉強がしたい」
県の情報誌を見て新たななる自分探しにいきます。これがあざれあの扉をたたき第一歩になったのです。

学びの楽しや

まず一九九四年に男女共同参画アドバイザー（県教育委員会主催）、翌年に地域研究塾を受講。そこで、「学んで得た知識を行動に移していく技法」や「何か起こそうとした時や、行政を変えようとした時には、思いつきだけを言っても通らない。それを実現していくためには資料に基づいて、データを揃えて説得させていく技が必要である」ことを知りました。

「学んだことは溜め込まないで、即、吐き出すこと。足りなくなったら、エネルギーを吸収すればいい」という当時の所長だった林のぶさんの言葉。また「グローバルな思考で、ローカルに行動する」という言葉が、現在増田さんの活動の源になっています。

ある時、地域研究塾の先輩に「海外研修の募集があるけれど、どう？」と声を掛けられました。「嫁だから」と言うのと、「そう簡単に決めつけてはだめ、お義母さんの考えがどうなのかかわからないでしょ。言いたくないで、相手の答えを決めてしまおうのは良くない」と諭され、「はっ」としたといいます。その夜、勇気を出してお義母さんに話したら、「行ってきな、行ってきな」と気持ちいい返事が返ってきました。

「今振り返ると、ここまで学んでこられた背景には、義母の応援・夫の協

力・子どもたちの理解があって実現できたことだと思つて、改めて家族に感謝していますよ」

「きゃべつ・くらぶ」の誕生

「生まれ育つた裾野市を元氣な町にしたい」と願っていた増田さんに、地域研究塾での学びを行動に移すチャンスが訪れました。

長泉町で行われたコンサートグループ「長岡竜介ロス・ビエントス」のケーナの演奏に感動！ 終了後、さっそく代表の長岡竜介氏に「うちの町（裾野市）でコンサートをしてほしい」と頼み込み、その足で文化センターへ飛び込んで、コンサート日を即決。

その記念すべき日が、暦の上で十五夜の満月だったことから、コンサート名は「月の夜のいざない」となりました。

それからが大変！ コンサートの準備スタッフを呼びかけたら、十人が集まってくれました。どこの台所にもあるポピュラーな「きゃべつ」のように、色々な料理法で企画して行こうと「きゃべつ・くらぶ」が誕生しました。

地域と「こ」になつて

主な活動は、年一回裾野市で行つて

いるケーナのコンサート。今年で八回目になります。

会員のコンサートにかける熱意は、半端なものではありません。そのパワーが、参加する演奏者・聴衆を盛り上げています。毎年、最後にみんなで「また来年ね。良いコンサートをありがとう」と言い合うことが、翌年のコンサート実現を可能にしていくエネルギーになっています。去年のコンサートでは、沖繩の民族舞踊エイサーをやりました。エイサーは、裾野市の青年団が沖繩研修で修得してきたもので、「発表する場所を捜している」との情報会員から聞いて、引き受けた経緯があります。

「地道に活動をしている若者に、スポットライトをあててあげたい」という思いは「きゃべつ・くらぶ」の真髓です。メンバーの意識の中に、そういう心意気が育ってきているのを増田さんは嬉しく思っています。

増田さんは、いつかこの町に「元氣なみんなをつくるための施設の充実」を行政に働きかけていこう、と思つています。

「私がこれまで学んで得たことを、地域で学びたくても学ぶことができない人に、メッセージとして広く伝えていきたいですね」

学びを自分にとどめない。 「地域に帰って伝えることが大切」



「NPO法人たすけあい遠州」代表

稲葉 ゆり子さん

(袋井市)

自慢の美味しい料理は、この笑顔から



地元産の新鮮な野菜を使ったバラエティーに富んだ料理



らの推薦と一般公募を合わせ三十五人でスタート。講義の中でジェンダーという言葉も初めて聞いたと言う稲葉さんは「恥ずかしいでしょうか？ そんな学校の中にはなかったから、会話として一つも！本当は教育の中になきゃいけなかったでしょうけど…」

また、カレッジで出会った女性たちの社会に対する意識の高さに、新たな発見と刺激を受けたと言います。

「三十年近く働いてきて、仕事をしていることが、社会参加だと思ってきました。カレッジで出会った女性たちが、いかに勉強して社会のことに目を向けているのかと圧倒された。働いているからって社会に目を向けているという事ではないって気づいたんです」

さらに、仕事をしていた時には考えもしなかったことが学びの中で芽生え、活動のきっかけとなったのです。

「それまで働いて給料もらって税金を払っていたわけでしょう。で、辞めてから、給料をいただかないから税金は払わなくてすんでるって、ちょっと自分の中で抵抗があったんですよね。こんな新しい出来たばかりのあざれあで、税金を使った良い講座を受けてるのに、お金払わないでいるなんて。これってやっぱり、あと何かしないと…地域への還元、地域の中で何かしなくちゃって、それが一番大きなきっかけですよね」

あざれあとの出会い

長年、学校の事務職員として働いてきた稲葉さんは、女性が働き続ける難しさを感じていました。「子育てが大変で辞めていく優秀な女子教員もいて、もったいないって思ってたのね。私が退職したら、困った時、手助けっていうか、声を掛けてもらえる人になればいいわって思っていたのよ」

そんな稲葉さんがあざれあとお出合ったのは十年前。あざれあが開館してすぐのことです。「退職した年にたまたま目にした県民だよりで女性力レτζジの募集を見つけて申し込みをしました」。当時のカレッジは、市町村か

相手の人生をありのまま受け入れる

「私自身が働く女性の支援を、と思っている、一人の思いじゃどうにもできない」。そんな稲葉さんの思いに賛同した人がいました。元同僚の松本柚子さんです。「いつか何か一緒にやれると良いよね」と二人が四十代だった頃、職場で漠然と思い描いていた夢が現実になろうとしていました。

平成七年秋、働く女性を支援する活動の準備会に三十四人集まりました。「最初から、仲よし小よしは誘わないうことにしました。安易なグループに



「困ったときはお互いさま」と家事援助・夕食宅配・外出支援など、暮らしの中のちょっと困ったことへの手助けを行っています

したくなかった。目的に向かって、活動できる“つていう人だけです。私も昔の職場関係の人に入ってくださいなんて言わなかったですよ」。それから毎月、地域のいろいろな人を呼んで「話を聞く」という勉強会を開きました。「人の生き方いろいろだよ」と相手の人生・生き方・言葉をありのまま受け入れられなければ、ボランティアはできないと感じていたので。

働く世代の応援を

活動を通して新たに見えてきたこともあります。「日常的に小さな困ったことで、例えば子どもさんが熱を出した、保育園で何かあった、という時お父さんに電話しますか？ お母さんですよね」。職場での過去の体験を重ね合わせた稲葉さんは、まだまだ女性に家事の負担が多いと痛感。しかし、そんな考えを軌道修正する出来事がありました。

パートナーが病気で入院、二人の子どもを抱えた働く男性から支援依頼があったのです。

「私たちが一日の内の一時間半、洗濯や食事などの家事援助をすること、ご主人も奥さんの病院へ寄ってこられて、子どもの食事の心配もしなくていい。あつ、これって働く女性だけじゃ

やない！これからは働く男性も応援しなくちゃつて」

平成十二年四月にはNPO法人として法人格を取得、現在会員は約三百人。

継続の秘訣を尋ねると「私たち最初と同じことをしていないの。同じように同じ場所で食事を作っていたら三年で辞めていたでしょうね。何かを選択しなきゃいけない時には、皆でとことん夜まで話し合います。お互いが思っていることをわかり合っていないと会としてまわつていけません。また自分たちの活動にとどまっていけないと、積極的に視察を受け入れたり研修にも出かけます。代表が行けない時は行ける人が参加する。あざれあで主催する男女共同参画の講座などに出てもらったり」と、学びをオープンにする姿勢は会員にも伝わっています。

動き出せば発信できる

人と人の出会いの場を築いてきた稲葉さんにとってあざれあは「謙虚に学び続ける場所。忙しくて月一回」※もくようの会」に出席しています。そこに行けば学ぼうとする仲間会えるし、学び続けるということが私の原点になっています」

さらに、これからのあざれあについてこう語ります。

「講座で学ぶことは良いことだけど、それだけで終わらないように、もう少し人を育てる、側面支援とか、県民が行政と共に力を結集して取り組むといった動きができるようなNPO的思想が、これからあざれあになきゃいけないんじゃないかなって思っていますね。私は学び続ける場所と想っているけど、他のものを求める人もいるんじゃないかな。せつかく名称も男女共同参画センターに変わったのだから、女性だけでなく、もっと若い男女も期待して、その場所に行くっていう場所にならないといけないんじゃないかな」

最後に、学びの先の「新しい世界」をひらくために必要なことは何だと思えますか？

「自分の中で勉強しましたって、満足している人が多いか少ないかわからないけど、もつたないって思うんですよ。自分の中だけで終らせないで、地域に帰っておしゃべりして、伝えることが大切。動き出せば発信できる。何かやってれば、何かやってくるの？つて、人つて近づいたり耳を澄ましたりするでしょ？」

稲葉さんの「学びを無駄してはいけない」という前向きな姿勢は、今後もたすけあい遠州の活動に生かされていくに違いありません。

※もくようの会

平成5～6年、あざれあ主催講座「しずおか女性カレッジ」修了生によって結成された会。現在も毎月一回(木曜)定例会を開催している。

行動しよう、行動しなくては 何も変わらないから



「DVサポートネット静岡」代表

横井美由紀さん

(富士市)

静岡県は、男女が共に参画する社会づくりのために地域で活動する団体、グループが行う事業を応援し、助成をしています。あざれあが担当する「静岡県地域活動パートナーシップ強化事業費補助金」(以下「補助金」)です。
「DVサポートネット静岡」は、補助金の助成を受けDVサポーター養成講座を行うなど、女性に対するあらゆる暴力をなくすために活動しています。
代表の横井美由紀さん(富士市議会議員)に話を聞きました。



DVと取り組む きっかけ

「ドメスティック・バイオレンスは犯罪です。犯罪なんだから社会全体で取り組み、できるだけその犯罪をなくしていこうとするのは当然のことでしょう」と、横井さんはきっぱりとした口調で話します。

夫や恋人など親密な間柄にあるものから、主として男性から女性の側に

対して振られる暴力をドメスティック・

バイオレンス(以下「DV」といいます。

一九九七年、公の機関としては初めて、東京都が「女性に対する暴力」調査を行いました。その結果、女性たちが非常に高い率で暴力を受けている事実が明らかになりました。

横井さんは九八年二月、富士市議会での一般質問で、富士市でもDVについてのアンケート調査を提案。

しかし市当局の回答は、生活の調査はするけれど、暴力に限った調査はしないというものでした。

そこで横井さん自身も会員である「AMOC富士」に、「市がやらないのなら、わたしたちの会で調査を」と掛け合いました。

「AMOC富士」は、もともと女性を政策決定の場に送ることを目的とする団体です。DVの実態調査を行うことに関しては、会員から疑問の声もあがりました。

横井さんは、「DVは社会の縮図よ。男女の力関係がもつとも顕著に現れている現象なの。男女平等だったらDVはあり得ないでしょ。そこには女性は男性の従属物、という考えがあるのよ。日常生活の中で実際に起こっている

るけれど、数字となって現れていないから対策のしようがない。だからその部分を公にしていかなければ」と訴えました。

「DVサポートネット静岡」の立ち上げ

九八年に県の補助金を受けて、「AMOC富士」は、三〇〇〇人に「生活の中の女性の人権について」アンケート調査を実施。まだDVを正面から取り上げるには抵抗のある頃でした。

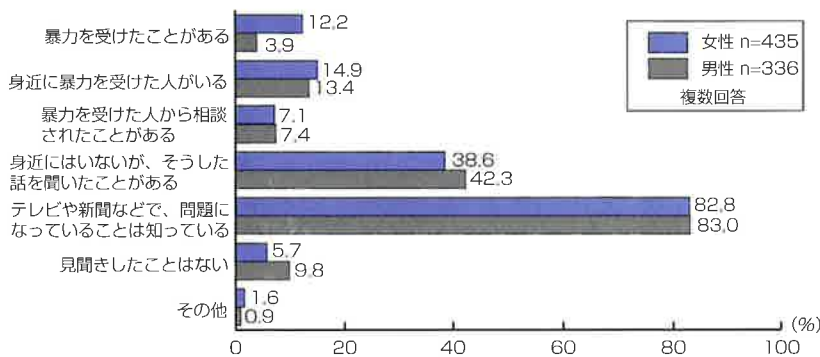
回答してきた女性二七〇人のうち、DVの経験があると答えた女性は八三人。自由記載欄には、身につまされる内容がびっしり書かれていました。

その数の多さと声に、横井さんたちは驚きます。そして、調査をこのまま終わらせては回答を寄せてくれた人たちに申しわけない、という思いを抱くようになりまし。と同時に、DV被害者を援助する必要性を痛感します。

その思いは「フェミニストカウンセリング講座」や「DVサポーター養成講座」の開催につながりました。講座終了後、さらに続けて研修を受けたい、シエルター(緊急一時避難所)の立ちあげまで一緒にやりたいという修了生と共に、「DVサポートネット静岡」を設立し、活動を続けています。

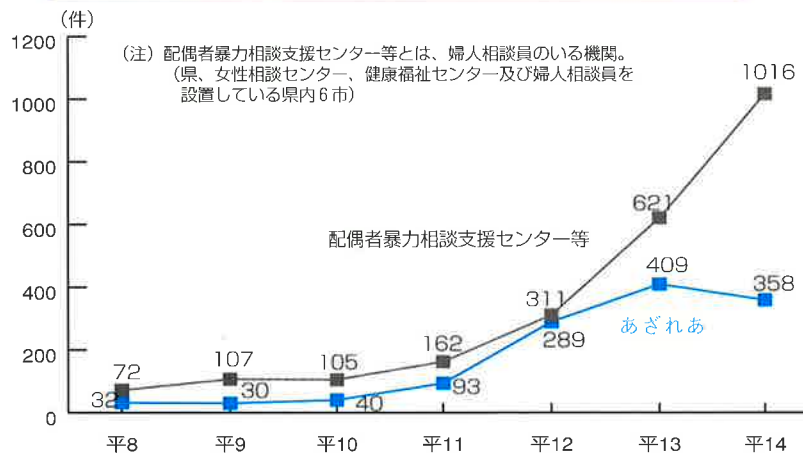


男女間の暴力について (平成14年・静岡県)



資料出所:「平成14年 男女間における暴力に関する意識調査」静岡県生活・文化部男女共同参画室

ドメスティック・バイオレンスに関する相談件数の推移 (静岡県)



資料出所:静岡県女性相談センター、静岡県男女共同参画センター相談室調べ

「DVサポートネット静岡」では、現在までに一〇家族一九人の一時避難の保護に協力。

「補助金の助成があったおかげで、DV被害を受けた家族が危険から逃れることができました。これからも被害者に寄り添った相談を心がけ、当事者が望む人生を歩んでいけるようにできる支援をしていきたい」と横井さん。

補助金が活動の原動力になる

「民間の団体が活動していく中には、会費だけではまかないきれないことが多々あります。補助金がつくということは、やろうとする活動を後押しすることになりますね。アンケート調査の

時もそうでした。お金のめどがついて、私たちは労力を出し、それが一つの形になる。補助金の助成制度がなかったら、やりたくてもできなかったでしょう」

「どういう事業を行っているか、成果は上がっているのかをきちんとチェックして、社会に必要なと思える事業には補助金を出して欲しい。民間団体も、いろいろな形で行政と協働し、

活動を進めていくことがこれからは大事。さらに、DVに対する社会の認識が広まり、きちんと対応できる様々な制度が整って初めて、被害者が声を上げることができる。男性向けのDVに関する講座や、被害女性が立ち直って、新しい生活に踏み出す準備期間を過ごす「セカンドシェルター」設置の運動など、課題はまだまだまだたくさんだと、横井さんは考えています。

「あとひと押しがあれば先に進める人のために、行政とも連携して活動していきたいわ。行動しなくては何も変わらない。男性と女性が自立した対等な関係でパートナーシップを築くことができる社会を実現させるためにも、行動しなくちゃね」